



もすめくるまづかこふん せきしつ 物集女車塚古墳の石室が一般公開されました

もすめくるまづかこふん
物集女車塚古墳は、物集女町南条にある古墳時代後期（6世紀中頃）の全長46mの古墳で、毎年期間を限定して石室が公開されています。今年は、平成29年5月23日（火）から31日（水）まで一般公開が行われました。

物集女車塚古墳は、^{じゆんな ひつぎ}淳和天皇の棺を運ぶ車を埋めた塚との言い伝えから地元では「車塚」とも呼ばれています。



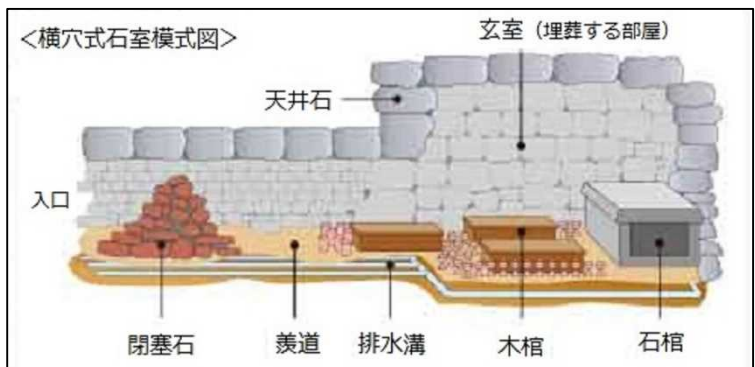
物集女車塚古墳の石室は、横に入口があるため「^{よこあなしきせきしつ}横穴式石室」と呼ばれます。石室の中は、^{せっかん}石棺（亡くなった人を納めた棺）を埋葬する^{げんしつ}玄室と、玄室への通路にあたる^{せんどう}羨道に分かれています。

玄室は、死後の世界「^{よみのくに}黄泉国」に向かう被葬者への送りの儀式の場でもありました。「^{よみ}黄泉がえり」という言葉は、ここから生まれたと言われていました。

石は堅固に積み重ねられ、裏込めという補強もされながら入念につくられています。おかげで、これほどまでに石室がしっかりと残っているのは、全国でも物集女車塚古墳ぐらいとのこと。

また、床面の地下には、室内へしみ込んだ雨水を外へ流すための排水溝が設置されています。

^{せっかん}石棺は「組み合わせ式家型石棺」と呼ばれ、大阪府と奈良県の境にある生駒山系の^{にじょうざん}二上山で採石された^{ぎょうかいがんせい}凝灰岩製の板材を組み合わせでつくられています。合計10枚の石で組み立てられており、そのうち蓋石には3枚の石が使われています。



天皇の位になると、蓋は大きな石板1枚でなされ、石棺自体もこの石棺の2倍ほどの大きさになるため、物集女車塚古墳に埋葬された人は天皇よりも下位であることが分かります。ちなみに、この時代はまだ夫婦で墳葬するという習慣はなく、単独で墳葬されています。夫婦での墳葬はもう少し後、仏教が伝わってから（7世紀頃）になります。

1983年（昭和58年）から本格的な考古学調査が開始され、石室内からは、馬具やガラス製の装飾品、金属製の冠、刀・鞘などの武器、土器などが発見されました。多くは金属でできていたため、かなり錆びてもろくなっていたとのことです。

